

AI・自動化のイノベーションが人間社会にもたらす光と影と技術倫理

(1) 人とAIの意思疎通をはばむもの

講師：西田豊明（京都大学名誉教授・福知山公立大学副学長）

AIは私たちの認知的・社会的な領域に踏み込み、情報内容に立ち入って人の能力を拡張するという点で、人類史上過去に類を見ないテクノロジーである。20世紀中期以降に情報通信技術の発展とともに研究開発が本格化したAIは、半世紀余りで私たちの生活空間に広く浸透し、日常生活でもビジネスでも大きな影響力を持つに至った。AIにもほかのテクノロジーと同様に光と影の側面がある。しかも、光と影の落差は大きく、ますます広がっていくようにみえる。AIを使ってこれまでにない強力なサービスを作り出すことができるようになった一方で、予想もしなかった陥穽に翻弄され、クライアントもサービス提供者も大きなダメージを受けかねない。そのようななか、人とAIの間の意思疎通を確立しないと、工学がこれからメリットのあるサービスを作り出していくことは困難であろう。本講演では、人同士が共有する意識(コモングラウンド)という概念によって意思疎通を捉え、私たちの日常でどのようにコモングラウンドが運用されているかを検討しながら、人とAIの間にどれだけのコモングラウンドを築くことができるか、何が困難かを論じる。

AI・自動化のイノベーションが人間社会にもたらす光と影と技術倫理

(2) AGILE GOVERNANCE & BEYOND:

SOCIETY 5.0時代の法制度

講師：稲谷龍彦(京都大学大学院法学研究科教授)

政府は、サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させたシステム(CYBER-PHYSICAL SYSTEM, CPS)により、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会であるSOCIETY 5.0の実現を推進している。サイバー空間を通じて様々なシステムが接続されるSOCIETY 5.0においては、SYSTEM OF SYSTEMS (SOS)と呼ばれる巨大なシステムが出現する。

CPS-SOSは、例えば自律移動ロボットによる流通網を確立し、労働力不足や気候変動といった社会課題を解決すると共に、新たな産業の種を生み出すものとして期待される。しかし一方で、CPS-SOSの動態性・複雑性は、公的機関がその権限と責任で制定するルールを通じた人々のコーディネーションという、従来の中央集権的・垂直的な統治手法を陳腐化させ、新たな課題を生じている。本講演は、この課題に対応するために提唱されたAGILE GOVERNANCEと呼ばれる新たな統治手法と、それが切り開く新たな法の姿について報告するものである。

AI・自動化のイノベーションが人間社会にもたらす光と影と技術倫理

(3) 技術者倫理の歴史と哲学から考えるAI・自動化

講師：伊勢田哲治（京都大学大学院文学研究科教授）

技術者倫理上の新しい問題について指針を作っていく上で、技術者倫理の歴史と哲学を知ることは一つの方向性を与える。技術者の倫理綱領は最初は同業組合としての倫理だったが、第二次大戦後に公衆への責任が意識されるようになり、1970年代の一連の事件を通して具体的な方向性が固まっていた。技術者倫理の背後にある思想としては、アメリカでは社会と専門職業の間の暗黙の契約という考え方が一般的だが、この考え方が日本においても技術者倫理の基本理念として適当かどうかということについては検討の余地がある。AIや自動化の今後の方向性を考える上でも、公衆の安全・健康・福利を最優先とする技術者倫理の基本原則の根拠にさかのぼって考えることで、方向性が見えるだろう。AIについてはAI自体が責任ある行為主体とみなしうるようになるかどうかという問題も関わるものの、最終的には技術者が公衆に対して責任を持つという基本線を見失ってはならないだろう。